

中央アナトリアにおける銅石器時代解明へ向けて —キュルテペ遺跡中央トレンチ発掘調査 2021 年—

紺谷 亮一 ノートルダム清心女子大学文学部教授
山口 雄治 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター助教
フィクリ・クラックオウル アンカラ大学言語・歴史・地理学部教授

Investigation towards the Understanding of the Chalcolithic Period in Central Anatolia: Excavations at the Central Trench, Kültepe, Turkey (2021)

KONTANI, Ryoichi Professor, Faculty of Literature, Notre Dame Seishin University
YAMAGUCHI, Yuji Assistant professor, Archaeological Research Center, Okayama University
KULAKOĞLU, Fikri Professor, Faculty of Languages, History and Geology, Ankara University

1. はじめに

2015年からキュルテペ遺跡北辺、西辺に設定したトレンチの発掘調査においては、前期青銅器時代における文化編年構築を目的としてきた。しかしながら、地下水が湧いたり、前期青銅器時代の巨大建築群に阻まれたりして、確実な銅石器時代層を発見するには至らなかった。そこで、今年度は、テペ中央部、ワルシャマ宮殿南部直下に新たなトレンチを設けた(図1)。結果的に当該トレンチで、後期銅石器時代文化層を確認することができた。ついに、当初の目的の一つが達成されたのである。

度ある事に、触れさせていただいてきたが、中央ア

ナトリアにおける銅石器時代編年研究は、80年以上前に行われたアリシャル・ホユック遺跡の調査以降、ほぼ進展がない状態である。また、そのことが、「西アジアにおける都市文明の起源」という重要テーマ(メソポタミアとの比較においてできないと言う点において)が未解明のままになっている要因となっている。

昨年度に引き続き、2021年8月3日~8月31日まで発掘調査を行った。今年度の発掘区は仮に中央トレンチと名付けた。南北16m×東西12mのトレンチを4分割して調査した。ここでは、暫定的に1区~4区としておく。

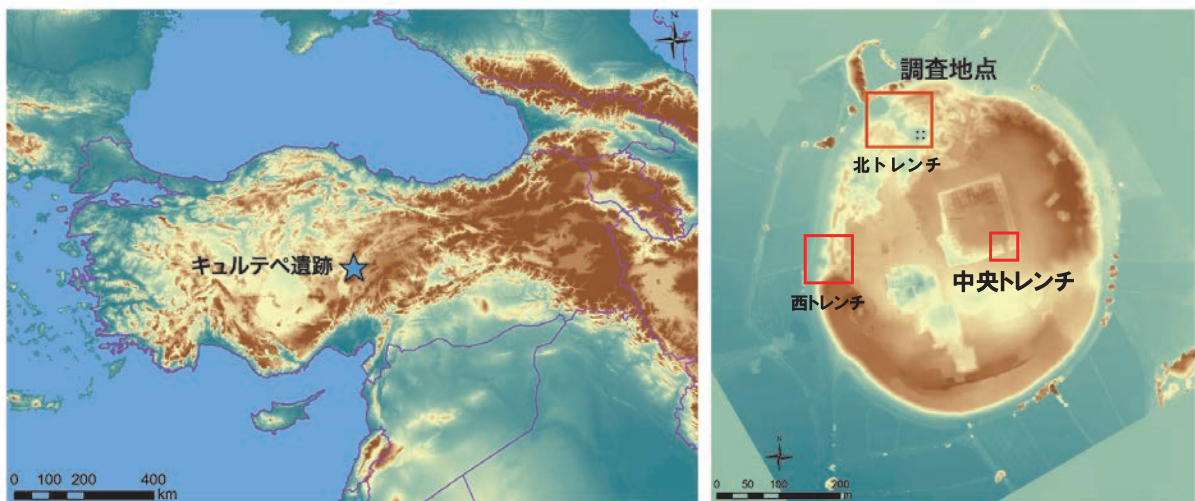


図1 キュルテペ遺跡の位置と遺跡地形測量図・調査地点
(左は SRTM3 データを使用して作成、右の地形測量図は早川祐弐氏作成)

2. 中央トレンチの設定

今年度、新たに設けたトレンチは、アッシリア・コロニー時代後期に年代づけられる、通称ワルシャマ宮殿と呼ばれる大規模建築址最南端部に位置する。当宮殿は南北約100m×100mの規模で、当初は2階建以上の構造を持っていたと考えられる。その為、基礎石は幅2mを超え、地表面を大きく掘り込んでつくられている。ワルシャマ宮殿が位置するテル中央部は、地形的に周辺部よりもかなり高くなっており、テル南西部トレンチ(前期青銅器時代後半の大規模建築址)との比高差は約7mである。テル中央部からは、エルジェズ山が一望でき支配者階級がモニュメントを設置するには、好都合である。それを示すかのように、ワルシャマ宮殿直下では、前期青銅器時代II期に属する、テペ中央部を囲むように楕円形の大規模建築群が存在する。しかしながら、大部分はワルシャマ宮殿下に埋もれている。また、ワルシャマ宮殿も含めテル中央部には、かつてH.フロズニーが強引に掘削した穴(当時の目的が粘土板文書発見にあったとは言え)があり、この行為によって多くの建築層が破壊されている。

以上のことから、ワルシャマ宮殿直下には、前期青銅器時代以前の文化層が存在する可能性があると判断し、中央トレンチを新たに設置することにした。

3. 日干しレンガ壁からなる大規模建築

中央トレンチでは、2つの建築層が明らかになった。発掘区全体は南に向かって傾斜しており、地表下約2.5mまで到達している。1区、2区では第1建築層が確認できた。

3区、4区では、第2層に属する、東西方向に伸びるジグザグプラン大型建築址が明らかになった(図2・3)。当該建築址は、幅1.5mを超える日干しレンガ(サイズもある)から構成され、壁体は高い所では、床面から2mまで残存している。床面には丁寧にプラスターが張られている。壁の基礎石は現段階では確認されていない。一般住居との相違点は獣骨の出土が極端に少ないことである。出土土器の中には、中央アナトリアにおいて、後期銅石器時代から前期青銅器時代I期に特徴的な遺物である、赤黒土器、表面に白色刻文が施された黒色磨研土器(ブユック・ギュレジック遺跡に類似例)、胴部が屈曲した深鉢(アリシャル・ホユック遺跡に類似例)等が出土した(図4)。



図2 大規模建築遠景
(縦に走る石列がワルシャマ宮殿の外壁、手前が中央トレンチ)



図3 大規模建築プラン



図4 白色刻文土器

4. 編年的位置付け

現段階での放射性炭素年代測定法データによると、ジグザグプランを呈する建築址は、BC3300-3000年に当たる。その一方で出土土器を概観すると前期青銅器時代I期の土器と多くの類似点が指摘できる。これは、中央アナトリア編年において、後期銅石器時代と前期青銅器時代I期との区分基準を何で判断するかという点が未だに曖昧であることの裏付けでもある。中央アナトリア編年は、ウルク併行期時代層を持つ、東アナトリアのアルスランテペ遺跡等から、かなり強引に採用されたものであり、再検討が必要である。

そんな中、調査終盤に差し掛かった時期に、キュルオヴァ遺跡発掘調査等、銅石器時代研究の第一人者である T. エフェ教授がキュルテペ遺跡を訪問した。その際、「前期青銅器時代I期への過渡期」(エフェ教授自らのチーム)という時代区分も念頭に置いておく必要があることを指摘いただいた(図5)。

いずれにせよ、今後キュルテペ遺跡において、今回よりも古い文化層が確実視されること、第2建築層の大規模建築址の広がり以下によっては、テル中央部を囲む未解明の大規模建築コンプレックスの存在が期待される。

なお、今年度の調査は、JP20K01097、JP21H00009、公益財団法人三菱財団人文科学研究助成、高梨学術奨励基金を中心とする研究費によって実施した。



図5 議論する様子
(左から2人目、T. エフェ教授、右端がF. クラックオウル隊長)

参考文献

- ・ Kulakoğlu, F., R. Kontani, A. Uesugi, Y. Yamaguchi, K. Shimogama, and M. Semmoto 2020. Preliminary report of excavations in the northern Sector of Kültepe 2015-2017. *Subartu* 45: 9-88.
- ・ 紺谷亮一 2020 「趣旨説明：アナトリアにおけるメガシティの起源」『日本西アジア考古学会第25回大会要旨集』9-10頁 日本西アジア考古学会。(http://jswaa.org/wp/wp-content/uploads/2020/10/25thJSWAA_abstracts.pdf)
- ・ 紺谷亮一・山口雄治・下釜和也・フィクリ・クラックオウル 2020 「中央アナトリアにおける銅石器時代解明へ向けて—キュルテペ遺跡北トレンチ発掘調査2019年—」『第27回西アジア発掘調査報告会報告集』49-51頁 西アジア考古学会。
- ・ 紺谷亮一・山口雄治・フィクリ・クラックオウル 2021 「中央アナトリアにおける銅石器時代解明へ向けて—キュルテペ遺跡北トレンチ、西トレンチ発掘調査(2020年)—」『第28回西アジア発掘調査報告会報告集』59-61頁 西アジア考古学会。